科学と魔術の交差

玄米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
科学と魔術の交差

【Ｎコード】
Ｎ６１３１Ｗ

【作者名】
玄米

【あらすじ】
ＩＳ…それは女性だけが使える科学の結晶。　その世界に正義の味方が紛れ込み、物語に切り込んでいく。そんなお話です。

No. 1

ある静かな夜だった。

なにげなく空を眺めていれば月を遮る小さい何か。

最初こそ戦闘機か何かかと思うがそれはないだろう。この空域を飛べる戦闘機は限られているし、ましてやこんな時間に飛んでいる馬鹿はいないだろう。偵察にしてもお粗末だ。

それに、落ちている。

加えて確実に戦闘機らしからぬ影。いうなれば人のような…

そんな考えを遮るように警報が鳴り響く。

そうか、と納得。

あの落下物に対しての警報なんだろう。

月が雲に隠れ、月光を遮られた暗闇を集団が走り抜ける。

「教官」
「ラウラ、これはどういうことだ」
「わかりません。唐突に上空に反応がでましたので…」

ドイツ軍も把握しきれぬ、か。
だとすればどこかの国の偵察、とも考えたが、だとすればこれほどお粗末なものは無い。姿の見えぬ戦闘機だったとしても、そこから落ちてくるなど阿呆だ。

落下地点には…　何もなかった。
いや、それは言葉が足りない。確かにクレーターのようなものはあるし、足跡のような痕跡も見受けられる。確実に人がいたのは確実だ。
ならばどこに…

私は、この時一つの疑問点を見落としていた。

高所から落ちて無事なただの人間がいるだろうかと。

「スパイの可能性を考えて総員警戒！　クラリッサはＩＳ展開の準備もしておけ！」
「了解しました」

可能性としては落ちてきた誰かがＩＳ操縦者かもしれない。
だとすれば森の中のこのクレーターはいささかおかしい。こんな侵入しましたという様な証拠を残す必要はない。よほどの馬鹿でない限りは。

それに…

「ラウラ」
「はい、血の匂いがします」

微かに香る鉄の匂い、生臭い不快な臭い。確実に軽傷程度ではこの濃さの匂いは無理だろう。
目撃した誰かを殺したか…　あるいは自らの血か。

「発見！　動く――――」

声が途絶える。

「…クラリッサ」

ラウラの掛け声にクラリッサがＩＳを起動。
間違いではない。発見した者が音もなくやられた。手負いにしろ何にしろ慎重になって悪いことは無い。

「教官は下がっていてください」

ここまで来たものの、ここはドイツ軍に任せる方がいいと判断し、後ろに下がる。

「聞こえているか。ここはドイツ軍の管理地だ。すでにこちらに危害を加えて罪から逃れらはしないが、投降するのならば手荒なまねはしない。

ＩＳもある。投降しろ。さもなくば…」

一分。その間、何かが動く気配は無かった。

「…死んでも後悔するな」

ワイヤーブレードを射出。それを横薙ぎに振るって木々を倒し隠れる場所をなくしていく。クラリッサがその後ろから射撃体勢。

――――――何かが動いた

生身。ＩＳを身にまとっていない。

「ラウラ」

「善処します」

殺さないようにはする、か。
はたして、そうできるかどうか…
暗がりから出てきた…　恐らく男。かなりやる。無駄がない動き、射線の見切り、かなりの腕前だろう。
だが、さすがにＩＳ相手では無理がある。ゴム弾の銃撃にさらされ、徐々にこちらの間合いに入ってきている。
「――――っ！？」
突如として動きが止まる。
ＡＩＣ、慣性停止結界。これに捕まれば終わりだろう。
私ならば…　いや、もしもの話は今は必要ないか。初見で見切れる奴がいたら素直にほめてやろう。
「――――」
背筋が冷える。
なんだ、奴は何を言った？　何だこの空気は…
「離れろっ！」
咄嗟にラウラに叫ぶ。
だが、あいつはこの空気を分かっていない。確実に何かをもらう。

そう思考すると同時に飛来音がする。

「くっ！」

数と勢いを持って放たれた何かはシールドエネルギーを削り、不意の反撃に集中力を乱してＡＩＣを解いてしまう。

「隊長！　各員撃てぇ！」

シュヴァルツェ・ハーゼの隊員が男に向かって発砲。

こちらは実弾だ。ここまで敵意を向けられ、攻撃されては捕縛という手段は取らないだろう。運が悪かったと思って諦めてもらうしかない。成仏しろよ。

発砲音と共に誰とも知らぬ男に冥福を祈った。

しかし。

金属音が立て続けに響く。

火花で見えた光景に、唖然とする。

男は持っていた剣で銃弾を弾いて見せた。それも多角度からの銃弾をだ。

ＩＳを持つ二人には二人にはその光景が見えたらしく、驚愕を隠せない。

その隙を、見逃しはしなかった。

「くあっ！？」

「かっ…！？」

苦悶。声に遅れること数瞬、ＩＳはその起動を終了した。

絶対防御。操縦者の命を守るために発動するそれが発動したのだろう。だが、それが一瞬か。私の眼にとてつもない速さで何かが飛んだ気がしたが…

シュヴァルツェ・ハーゼの隊員が全滅するまで、さほど時間はかからなかった。

男はＩＳ二人を倒し、追われることよりもここにとどまりこちらを動けなくするという判断をしたようだ。

ラウラは辛うじて立ち上がったが左肩を抑え、クラリッサは動

かない。触診した限りでは命に別条はなさそうだ。確実に骨は折れているだろうが。

「さて、まだやるか？」

「…」

この空間で私以外に傷を負っていない者はいない。男も然りだ。

「さすがにここまでやられて逃がすわけにはいかんのでな」

念のためと持って来ていた刀に手をかける。

月光が雲を抜けて降り注ぐ。

照らされた男は…　血濡れの騎士だった。

その手には何も握っていない。だが、滴る血は途切れることを知らない。

ここまでの戦闘でよくも倒れなかったものだ。ずっと出血があったとすれば動いていたことも含めて出血多量で死にかねん。

銀髪すら血に染め、紅い外套は赤黒く、鷹のように鋭い眼はこちらを射抜かんとするように。

だが、こちらにもこちらの事情がある。

「腕の一本は覚悟してもらおう」

――――男はこちらを馬鹿にするように笑った。

結果だけを言わせてもらおう。
私が勝った。いや、私の勝利は必然だったか。
男はすでに満身創痍。どんな手品を使ったかは知らないが、一瞬で二振りの剣を構えた。
私が踏み込み、居合の要領で刀を抜く。
男が防ぎ、カウンターを狙うだろう――――と思われたが…
すでに限界を迎えた男の身体は力なく私の刀に切り裂かれた。
幸い、剣が軌道を変えたことによって浅くも深くもない程度の傷にとどまったわけだが。
問題は出血の方だった。
倒れから男は生死の境を彷徨ったことだろう。私の刀傷を抜きにしても…　いや、止めを刺したのは私か。
確実な止めを刺そうとしたラウラ達を止め、ドイツ軍の治療施設に搬送。
現在は集中治療室で銃を構えた奴らに囲まれて生死の境で寝苦しさを覚えていることだろう。

男は、身分を記すものは何一つ持っていなかった。
その身一つ、持っていたのは白と黒の剣だけ。私の刀をもってしても刃こぼれ一つせず、むしろ刃が欠けたのはこちらだった。
かなりの業物と見受けられたが、今は厳重にドイツ軍に保管されている。

それにしても時代錯誤な格好だ。
紅い外套、胸から肩にかけての鎧、そして剣。
銃すら持っていなかったのに絶対防御を発動させた何かをあの男は持っているはずだが、何も持っていない。剣が二つだけだ。その剣は確実にＩＳではないし、鍛えられた者だということははっきりしている。

さて、そろそろ二週間だが目を覚ましてもらわないと面倒になってきたな。
主に私が質問したいことがあるというのにここまで寝られてしまうとつまらない。
平手の一発でも食らわしてやれば起きるのだろうか？

あぁ、忘れていたが奴の怪我は銃によるものだとわかった。シュヴァルツェ・ハーゼの者ではないが、全部で5発。背、胸、足に確認された。

よくもあそこまで動けたものだと感心するが、呆れはそれ以上だ。

「教官」

扉の向こうから声が聞こえた。ラウラか、今日はすでに訓練は終わったのだが、また個別に訓練か。

「何だ」

「奴が目を覚ましました」

『ここがどこだかわかるか』

私が到着した時には軍の上層部だろう男がベッドに横たわる無抵抗な男に銃を向けていた。

『…言葉からしてドイツか。
それにしても時代は変わったな。今のドイツではあいさつで銃を向けるのが主流か？　それともあんたの個人的な趣味か？　だったら好まない者が多くいることだろうかやめることをお勧めしよう』

ふん、状況だけは理解しているようだ。
茹でたタコのように赤くハゲ頭輝くお偉いさんは引き金に指をかけた。

『そのぐらいでいいでしょう。もしかしたらスパイかもしれないというのになにも情報を聞き出さないまま殺すのは何も得る物がない』
『…そうだな。命拾いしたな黄色人種が』

む？　ということはこの男は東洋人か。
だが、それよりも。

『聞き捨てなりませんね。それは私が彼と同じ東洋系の生まれと知っての発言でしょうか』
『…ふん』

それ以上何も言うことなく、ハゲは治療室を出て行った。

「最近の中年はすぐに堪忍袋の緒が切れるのかね？」
「さぁな。…日本人か、貴様」
「そうだ」
「名は」

「人に名を訪ねる時は自分からと習わなかったか？」

後ろで銃に手をかける音がしたが、手を上げて静止させる。

「織斑千冬だ」

私が名をすぐに名乗ったのが意外だったのか、小さく男は笑った。

「私はエミヤシロウという」

No．1（後書き）

どうもです。玄米と言います。
ここまで読んでいただきありがとうございます。
こちらに投稿させていただくのは初めてで、加えてつたない文章で構成し、妄想成分たっぷりのものですので、気分を害された方は申し訳ありません。
お楽しみいただけたでしょうか？　もしお楽しみいただけたなら幸いです。

間違えて短編していたので連載に変更です。

No. 2

あの男…　エミヤシロウと名乗った男を集中治療室から独房、いや、観察房と名のついた部屋に移してから早くも一月経った。
エミヤは特に行動を起こすこともなく部屋でおとなしくしている。
ドイツ軍は最初こそ奴がスパイではないのかと勘ぐっていたが、質問をする時に脈を測ってはみたものの全く異常はなし。むしろこちらが質問を返されるぐらいだ。
世間知らずのただの阿呆と思えば気が楽かもしれんが、奴はどこまでも得体のしれない奴だった。

ＩＳを知らない。
現在の西暦を知らない。
女尊男卑の今を知らない。

常識の範囲を一部ではあるが奴は知らなかった。
嘘を言っているようには見えない。逆に情報を求めているようにも思えた。

奴の所持品をどんなに調べても、奴が落ちてきたと思われる地点を調べても怪しい点は見つかることはなかった。

どうやってあの高所から無事に着地できたと尋ねてもなんともおかしい。

「少々、身体が丈夫でね」

丈夫で済むならこの世に病院はいらないだろう。
だが事実として奴の身体は鍛え抜かれていた。見たことがないほどに無駄がなく、見たほどがないほどに傷だらけ。
刺し傷、銃痕、抉られたような痕…　とてもではないがこいつが現代人だという認識を私はしばらく信じなかった。
時代が違う。生きている時代が中世かとでもいう様な…　いや、例え中世の時代にこいつがいたとしても奴は異端だっただろう。

「奴はどうしている」
「はっ。奴は観察房にて本を読んでいます」
「…歴史か？」
「はい。歴史書だけではなく様々なジャンルに手を出して読み漁っています」

最初こそＩＳ関連の本を見ませてくれないかと言っていたが今では新聞や歴史など『今の世界』を調べるかのように一日本を読んでいる。

怪しい。しかし、これ以上は奴の情報がない。エミヤシロウ…
衛宮士郎は日本に存在しない。
奴はいない。世界にいない。いるのは同姓同名の他人の空似。

二か月もすればドイツ軍も奴を警戒こそすれ大きな注意を置くことは無かった。
もう釈放して密入国でもなんでも罪をつけて追い出してしまえば簡単なんだろうが、奴はどんな理由があってもドイツ軍の基地内に侵入している。それがどこからか漏れれば無駄に神経をすり減らさないといけなくなる。それは面倒だと、いまだに保留となっている。

ふむ、ならば私が有効に利用してやろう。

「組み手？」
「そうだ。武術の心得はあるのだろう？　ならば付き合え」

最近はラウラ達の相手しかしていない。それも手を抜いてだ。
本気で動いたのはこいつを相手にした二か月前。ドイツに来てからすでに半年は経ているが、これ以上は私の身体が錆びてしまう。

「…私は一応、侵入者なんだが」
「侵入して何か利があったわけでもないだろう。
それに、貴様は国籍不明。どこに行くこともできず、どうすることもできないここのお荷物だ。どうせなら私が有効に利用してやろうというわけだ。
貴様もそろそろ身体を動かしたくて仕方ないだろう」

部屋の中で筋トレのように身体を動かしているのは知っている。
「…私が君を人質に逃げるという可能性は考慮しないのかね」
「そんなことができるなら貴様はすでにここにいないだろうさ」
過大評価出なければこいつは私と同等の実力はある。もしくはそれ以上。
ＩＳを生身で倒せる何かを持っている何かを持っていることは確かだ。それがどんなものにしろ、こいつほど今の私に必要なものはない。
「わかった。引き受けよう」
「よし。ならばついてこい。監視はつくが問題は無いだろう」

「…」
「…」
お互いに袴姿。
動きは無く、お互いを見定めるように自然体。
こいつ…　本当に何者だ。
対峙して改めてわかる威圧感、存在感は普通ではない。
隙がない。迂闊に踏み出せない。私を見定めるその眼がこちらの命を掴んでいるようなそんな錯覚。
しかし、隙がないなら作り出すまでだ。
踏み出し、組にかかる。

その手を奴は払い、こちらはすぐに次の手に移る。

当て身、組、合気。

それらを奴は防ぎきる。なるほど、優れた防御だ。だが、ずっとそれでは…

隙ができる。

が、私はそこに手を出さない。

すぐに手を出してはいけないと、勘に似た何かが警告を発する。

奴の一瞬の驚き、しかし、一瞬だ。叩き伏せるほどのものではない。

五分もすると、息が上がり始めたのは私の方だった。

思った以上にこいつの威圧が精神的に来たということだろうか。

まだ余力はあるが、奴はまだまだだろう。

だが、それに油断するがいい。その時が私の勝利に繋がるのだから。

そしてその時が来た。

大きくつきだされた左手。重心が前に出すぎだ。

これに合わせて投げる――――はずだった。

投げの体制に入った身体が固まる。いや、止まる。

この動揺に奴は左手を回し、私の手を掴み投げる。投げられ、体

制を崩した時にはすでに関節は極められていた。

「…私の負けか」
「いや、素晴らしい動きだった。油断をすれば負けていたのは私だろう」

大きく息を吐く。
私が思って以上に奴も消耗していたようだった。汗は流れていないが、身体に熱は生まれた。

「まだ続けるか？」
「いや…　私の方が限界だ。傷が痛む」

そんな感じを一切出さずに、壁際にもたれ掛かる。

組み手は日を置いて何度も行われたが、８割負け越していた。
そして、その光景を見つめる瞳があることを私達は見逃してはいなかった。

エミヤシロウの眠る部屋に一つの影が現れる。
暗がりに見える微かな光はナイフ。それを足音、気配を悟られぬように静かにベットに近付く。

ベッドの横に立ち、片手を振りあげ――――下ろした。

「――――!?」
「動くな」

声は――――男のものではなかった。
そして、首に触れられる感触。冷たく、細い首にまとわりつく。

そして唐突に部屋に明かりが灯される。

「…ラウラ、何をしている」
「…」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。
シュヴァルツェ・ハーゼ隊長。
その顔はエミヤシロウに向けて憎悪を向けていた。

尊敬する織斑千冬が負けた。男に…　教官の弟と同じ弟に。
泥を塗られた。教官が私を見なくなった。興味の対象がエミヤシロウに向いた。

ラウラの心は全く余裕がないほど、エミヤシロウを排除するということしか考えられなかった。
後のことは考えず、ただこの男を排除することだけ。

その様子に千冬は呆れたように溜息をつく。

「ラウラ、お前…」

その声が耳にはいった。

ようやく、ラウラはナイフを離し悔し気に俯く。

ラウラは思う。これで私も用無しの道具かと。

「何故気配を部屋の前から消さない」

「…？」

千冬が言った意味を良く理解できなかったのか、珍しく困ったような表情をする。

「殺すまで行かなくとも奇襲をするというのであれば気配はするときに消すのではない。始めた時から消しておくものだ。
わざわざ監視カメラを押さえてまでやったのだ。やるなら徹底的にやれ」

まさかの千冬からの許可にますます意味がわからなくなってきた。

「そうだな。部屋の前からでは意味がない。
加えて、スライド式の扉とはいえ音が出る。奇襲を企てるならもう少し場所を選ぶべきだったな。視界を確保するのならも暗闇に目を慣らすのに時間が短い」

エミヤシロウは壁際にいた。
ラウラはエミヤシロウが嫌いだが、その顔にはもっと嫌いになるようなニヤニヤとした笑みが貼り付けられていた。

「ベットの中身もよく考えた方がいい。いや、私をどうにかすることで頭がいっぱいだったか。冷静になればベットの中に誰もいないことは訓練中の君であればわかっただろうに。
今度は場所と状況を見定めて奇襲をするといい。成功率が上がる」

今度は襲われた本人が助言。いよいよラウラは本気で困ってきた。

「ラウラ、お前に一つ課題を出してやろう。
これがクリアできれば…　そうだな、お前の望むことを私ができる範囲で叶えてやろう。まぁ、できればの話だが」

そう言って千冬は混乱したラウラにさらなる混乱を加える。

「一週間、この間にＩＳと銃以外を使用してエミヤシロウに一本入

れろ」

不意打ち、夜討ち、袋叩きなど時間と手段は問わん、と。

ラウラは本気で意味が分からなくなった。

No．2（後書き）

はい、マダオです。嘘です玄米です。
暇だったので…　ちゃちゃっと次の話を投稿です。
前のやつは連載ではなく短編で投稿してしまったので今度はちゃんと連載で投稿しますよ。
さて、次はどんな感じになるのでしょうか？　私にもわかりませんｗｗｗ

No. 3

「残念だったな」
「くっ…」

今日もまた一本も入れることができずに日付が変わる。

千冬の課題が始まってすでに三日。
言われた通り奇襲、不意打ち、夜討ち… なんでもやった。
ＩＳと銃以外なら何でも使用可だというのならと、死なない程度に毒も盛った。しかし、それはなぜか巡り巡って私の食事に… 何故だ！？

エミヤシロウは基地内の一部を除いて自由に動けるよう教官が手配した。無論、抗議は聞き入れられなかった。理由？ それは教官だからに決まっているだろう。

とにかく、奴は基地内の蔵書室にいることが多い。基本的には今まで読んでいなかった本を読み漁っている。
何度もその時を狙った。気配を完全に殺し、奴を殺さない程度に重傷を負わせることを目的とした。

「ふっ」
「！？」

一瞬で投げられ極められ意識を刈られる。
気がつけば奴は何事もなかったかのようにそこにいて本を読んでいた。

ある時は――――

見つからん。
どこにいるというのだ。モニターにも映らん。外に出た様子もない。
くそっ、今日こそ仕留めてやろうと――――　肩を誰かが叩いている。なんだ、今は奴を…

後ろに、いた。

奴は私を見つけてからずっと背後にいたそうだ。
少なくとも数時間は。即ち、私が尾行に気がつかなかった時間でもある。

私の中で何かが崩れた気がした。

期限の一週間の最終日。
私は…　一度も、唯の一度も掠り傷すらつけること叶わず負け続けた。

手こずらせることも…　一度もっ…！

「…協力してほしい」

恥を忍んでシュヴァルツェ・ハーゼの隊員達に頼む。

「このままでは織斑教官が穢されていく。あの男に…　エミヤシロウに…！」

それだけは防がなければいけない。

だが、私一人ではどうすることもできなかった。

「それに。このままでは教官は極東の地へ帰ってしまう。あの地に何もない。この場所こそが教官にふさわしいのだ。教官はこの課題をクリアできれば私の望むことを聞き入れてくれる。その場合はドイツの地に残ってもらうつもりだ。

エミヤシロウを排除するのに、協力してほしい」

隊員達は一様に動揺する。

確かにエミヤシロウは脅威だ。教官と戦い勝利するその実力――――いや、あれは教官が手を抜いているのだ。

でなければ教官が負けるはずがない。

「隊長、よろしいでしょうか」

「なんだ」

クラリッサは分かってくれるはずだ。
奴を排除する必要性を。

「それは隊長自身の為ではないのですか？」

一瞬、頭が真っ白になった気がした。

クラリッサは何を言ったんだ？

「それは隊長自身の為ではないのですか？
確かにエミヤシロウは脅威でしょう。男だろうと何だろうと我が隊を全滅させ、ＩＳすらも打倒した彼の力はまぎれもなく本物。確かに不審な点はいたる所にありますが、ですが、隊長のように穢されるという意見には賛同しかねます。
何を持って穢しているのか、それは私にはわかりかねます。
加え、極東の地に帰国してしまうのは我が国にとって痛手でしょう。残っていただきたい気持ちはわかりますが、それは教官の気持

ち一つ次第です。残した家族がいると聞きます。それを蔑にしてまで教官はこの地に残るでしょうか」

何を言っている？
エミヤシロウは教官に害悪だ。それがどうしてわからない。
教官に相応しいのはこの地だ。ドイツだ。我が軍だ。家族？　教官の栄光を怪我した憎い男のことか。あのような男などどうでもいいはずだ。

「命令ですか。それならば私共はそれに従います」

そうだ、命令だ。それで私は――――何を得る？
教官？　強さ？　何を得るのだろうか。
何を迷う必要がある。ここで命令だと言ってしまえばこの課題は解決できるはずだ。

何故、それが言えない。

「命令でないのでしたら、私は辞退させて頂きます。
エミヤシロウには恨みなどはありません。私の未熟から倒されたのですから」

失礼します、とクラリッサは敬礼して去った。

他の隊員も同様に。

そうか――――――やはり頼れるのは自分自身の力だけか。

「千冬はＩＳを使うなと言っていたはずだが？」

ラウラは何も答えない。

その眼はただ、エミヤシロウを排除するという意思だけを灯した黒く――――冷たい氷のようだった。

「わざわざ練兵場にまで来たのは正解だったか。重火器を中で発砲されてはかなわん」

危機的状況にもかかわらずエミヤシロウは挑発するような笑みを絶やさない。
だが、ラウラにはそれに反応するだけの余裕も感情もなかった。
レールカノンがエミヤシロウを倒さんと撃たれる。
しかし、それを悠々と避けて見せた。
「中々怖いものだな。しかし、まだまだ甘い」
ワイヤーブレードも使って追い詰めようするが、簡単に避けられていく。レールカノンも使いどころを得ない。
ＡＩＣは前回のことがある。注意して使おうにもあの時のように反撃されてはどうしても後手に回る。

しかし、どれだけ攻撃されてもエミヤシロウは反撃をしない。
余裕さえ見えるが、それでも反撃をしない。

「何故攻めない」
「攻める余裕があるとでも？　ＩＳに生身で立ち向かうなど狂気の沙汰だ。避けるだけで精一杯だ。
このままでは死んでしまうかもしれん。そろそろやめないか？」
やめるつもりなどさらさらない。
今日は教官が何故かいないのだ。ならばこのチャンスを逃す手は無い。この男を後でどんなことになろうとも排除してしまえばいい。
十数分。エミヤシロウは避け続けた。

しかし、傷が完全に癒えていないのか完全なる隙ができ、その隙をＡＩＣで捉えられる。

ラウラは前回のことを考慮し、ＡＩＣを維持しつつも周囲を警戒する。

「む、このままでは拙いか」

ようやく自身の状況を理解したのか。

しかし、もう遅い。

「このまま叩きつければ――――」

警告音。

数瞬の後、機体が大きく揺れる。

「やれやれ…」

何が起こったか、ラウラにはわからなかった。

エミヤシロウは何もしていないのは分かっている。以前のように何かが飛来してきたのではなく…　撃たれた。

誰に。そうだ、誰に撃たれたのかが重要だ。

ここでようやく視界が広くなったかのようにラウラには周囲が見

えた。

周囲には武装した兵が十数名。

「一体なぜ…」

『これはやむを得ないのだボーデヴィッヒ大尉。
その男はこの基地に侵入し、なんらかの情報を得たに違いない。
それを釈放などと…　あの日本人は何を言っているのか』

エミヤシロウに銃を向けていた男がそこにはいた。確か階級は…中佐か。
その表情が私は嫌いだ。私達の隊を見下したような視線も、教官を侮辱したことも。その感情はエミヤシロウよりも上かもしれない。

それに、こいつは私もろとも攻撃した。

『あぁ、すまんな大尉。当たってしまったよ』
『何が当たっただ！　邪魔をするな！』
『邪魔などではない。君に協力してやろうというだけだ。その男が

邪魔なんだろう？　だったら私に協力…　いや共闘したまえ。それで解決だ』

男は頼んでもいないのにべらべらと語りだした。
もしもエミヤシロウが何かの情報を掴んでいた場合は上官の責任になりかねないこと、面倒なことになるぐらいだったら情報を聞き出すこともなく殺してしまえばいい。どうせ国籍もない存在のない人間だからと。

『さぁ大尉。その男を握りつぶしてくれ。それで終わる』

…それは一本取ったということになるのだろうか。
この状況で私はそんなことを考えていた。

教官の命を破り、ＩＳを使用し、銃どころからレールカノンすら使った。なのに倒せない。悠々と避けられ、恐らくは前と同様にＡＩＣも抜けれるだろうに。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

命を握られながらエミヤシロウは口を開いた。

「君は隊の人間を呼べ。これは軍内部の“反乱”だ」

一瞬だった。

握られていた身体は一瞬ですり抜け、遮蔽物の方へと走り抜ける。

『何をしている！　くそっ、撃て！　撃ち殺せ！』

銃弾がエミヤシロウに向けて放たれるがそれは一切掠ることもなく奴を遮蔽物まで走らせてしまう。

兵が周辺を包囲していく。

…私は何がしたいのだろう。
エミヤシロウは隊の者を呼べと言った。確かにこれは反乱…　反乱なんだろうか。
上官の言うことは気に入らないのは確かだが、言っていることは間違いでもない。
私も軍人だ。上官の命令には従わねばならない。先ほどのように私が隊の者に命令だと言えばエミヤシロウは…　倒せたのだろうか。

認めたくはないが奴の実力は一級品だろう。
教官を組み手で倒したのも頷ける。私では運よく掠る程度が限界だろう。教官と同レベルであるのならＩＳを使ったとしても勝てるわけがない。

私が勝てるはずがなかったんだ。
教官の悪い冗談だったんだ。

私の感情に呼応するようにＩＳが待機形態に戻ってしまう。

私は何もできない。上官が出てきている以上、私は協力はするかもしれないがエミヤシロウを助けるということはできない。
教官の課題はクリアしたい。しかし、あいつは強い。わつぃよりも高みにいる奴をどう倒せというのだ。

諦めるしかない。

諦める？
その言葉が私の中で反芻される。

諦めたのは、教官が来る前の私ではないか。
教官が来る前までは何もできない唯の不良品。それを変えてくれたのが織斑教官だった。
訓練に次ぐ訓練。厳しかった、辛かった。でも自信に繋がった、世界を変えた、自分を変えてくれた。

努力は報われる。例えどれだけ時間がかかったとしても今までのように、そしてこれからも諦めない限りは！

邪魔なのは…

『全員招集！』

ＩＳを通して通信。
通信先は――――

『練兵場にて中佐殿が反乱を起こされた！

私は先にこれの制圧にかかり、シュヴァルツェ・ハーゼ総員でこの反乱を阻止しろ！　隊はクラリッサが率いて到着次第制圧に掛れ！』

まずは邪魔者を排除してからだ！

中佐は隊が到着する前にはラウラによって気絶させられ、他の兵はラウラの介入に気がついたエミヤシロウによって、シュヴァルツェ・ハーゼの迅速な戦闘によって全滅。

この騒動が終わり、中佐達を連行する時に千冬がどこからともなく現れる。

「ほう、中々大事になってしまったな」

「企てた本人が何を言う」

この反乱…　いや、中佐の独断による行動は千冬によって誘導させられたものだ。
エミヤシロウのこれからに対して釈放を上層部に勧めたのは千冬だが、中佐を含め幾人かは良い顔をしなかった。死人に口無し、殺してしまえば何も心配することがないと。
さすがにこの意見は却下されたが、ラウラのような試験管ベビーのこともある。エミヤシロウ本人は知らなかったが、もしも他の国などに知られればドイツはどうなっていたことだろうか。

その心配は一切なかったわけだが、不安に駆られた思考は加速する。
千冬はこれを抑えるためにこれまではエミヤシロウから離れることはなかった。しかし、いよいよ面倒…　いや、抑えられる限界を迎え、いっそのことあぶりだしてしまおうという結論に至った。

これまでいなかったのは市外に出て日本食を食べてきたそうな。

「いいではないか。貴様にしてみれば命の危険が多少なりとも少なくなったわけだ」
「多少、か」
「多少だ。む、傷が開いたか？」

エミヤシロウの服に僅かに赤いシミ。

「そのようだ。まだ完治しないとは、やれやれ、情けない身体だ」
「少しは身体を労われ。常人なら半年はベットの上だぞ」
「人間離れしているのは理解している。包帯を換えてくる」

そう言ってエミヤシロウは医務室に向かって行った。

「さて、ラウラ。奴から一本は奪えたか？」
「いいえ…」

期限は今日中だが、この騒動ではそうもいかないだろう。
中佐をやったのは自分で、それに率いられた兵たちはシュヴァルツェ・ハーゼが制圧。ＩＳを出してはいないが、聴取が今日中にあるだろう。

「時間はまだあるぞ。まだやっていない手段で一本取ってみろ」

ではな、と千冬はそれ以上何も言わなかった。

ラウラはエミヤシロウにＩＳを使ったことを咎められると思ったのだが。

「隊長」

その声はクラリッサだった。

「なぜ、隊長は我々を呼んだのですか？」

それはクラリッサだけではなく隊の全員の疑問だった。
ラウラはＩＳを所持している。反乱は問題行動。これを制圧するためにＩＳを使用したのであればラウラ一人で十分すぎる。隊を全員招集する必要性はどこにもない。

「ＩＳも使用せずに制圧したのは見事です。エミヤシロウも同様ですが…
ですが、ＩＳを使用すれば我々を呼ばずともより迅速にできたはずです」

今までがそうだった。
ラウラは隊の人間と行動を共にするのは作戦や訓練のみだ。千冬の存在があってこそこれまで続いてきた。

「確かにＩＳを使えば簡単だった。だが…　それでは…」
「それでは？」

珍しく言葉が途切れる。
だが、ラウラは小さく声を絞り出した。

「それではエミヤシロウに負けている」
「もうすでに負けていますが…」

それは思わず出てしまった言葉だった。
確かに負けているのは事実だがこの発言はラウラの琴線に触れてしまったかもしれないとクラリッサは考えたが…

「…たくなかった」
「はい？」

小さな声でよく聞こえなかった。
それにラウラはクラリッサ達の方を向いていなかったのもあって声がよく聞き取れなかった。

「エミヤシロウに、負けたくなかった」

頬を少しだけ赤らめ、まるで年相応の少女のようだった。

しかも理由は負けず嫌いが原因。

隊は心を何かに撃ち抜かれた気がした。

より顔を赤くしたラウラは全員に向き直り、声を張った。

「私はこれよりエミヤシロウに奇襲を仕掛ける！

そして、これは命令ではない。だが、参加してもらいたい。
織斑教官と同等の実力の持ち主である奴との戦闘訓練は実力の向上に繋がると私は考える！
我らは負けた！　あの夜手負いの奴に負けた！　何故負けた？油断、ＩＳがあるという慢心、男だからということもあるかもしれない。だがそれ以上に我らの訓練が足りていない！　実力が足りない！
…織斑教官にご指導していただいたが我らはまだまだ弱い。より強くなるにはご指導していただく必要があるが、それだけではない。
私達が努力し訓練し強くなることが必要だ。強くなるという向上心がより必要だ。
私は弱い。一人ではエミヤシロウに掠り傷一つ負わせることもできない。だが、隊の力をもってすればそれも可能なはずだ」

一度、間を置いて呼吸を整える。
赤くなった顔を今は真剣身を帯びて普段のラウラに戻っているかのようだった。

だが、何かが違う。

「…協力、してほしい」

言葉は足りないだろう。一瞬で自信がなくなったかのように俯いて、凛とした空気は消えてしまう。

だが、隊には一つの共通の思いがあった。

ラウラに協力を要請されるのは訓練以外では初めてだ。訓練でも隊を頼ることは少ない。それが今、隊に協力してほしいと言った。

だが、先のように自分だけの為というわけではない。

命令ではない。

隊のものは一様に――――

ラウラに純粋に頼られたことが皆、嬉しかった。

これを口にすればラウラは動揺し意味を得ない言葉で否定するだろう。

だから、いつも通り。でも、少しだけ違うシュヴァルツェ・ハー

ゼで動くのだ。

「隊長」

「…なんだクラリッサ」

いつものような空気ではないが…　それでいい。

このまま続ければいつもの――――いや、少し違うラウラ・ボーデヴィッヒになるのだから。

「作戦の指示を」

隊列を揃え姿勢を整える。

その様子にラウラは一瞬、呆然としたが表情を改め、告げる。

「作戦はない」

その言葉に不安や迷いはない。

ただ自信を持って。

「袋叩きだ！」

この日、エミヤシロウは日付が変わるその時までウサギの恐ろしさを知ることとなる。

Ｎｏ．３（後書き）

はいどうも、玄米です。
長くなりましたね。なんか数えてみたらこれまでの倍は書いたんですね。びっくり。

なんかいろいろすごいことになってきましたね。書いていてビックリですｗｗｗ
感想を書いていただけたら非常に励みになるので指摘も含めてドンドンやっちゃってください！

No. 4

もしも、平和という言葉が真実ならば。
どうして私はここにいるのだろうか。
裏切られ、貶められ、疎まれる。

もしも人が救いを求めるというのなら。
オレはこの世界で何ができるのだろうか。

平行世界の魔術とは無縁の世界。未来に奔走し魔術を必要としない世界で――――オレはなにができる――――

「料理？」
「そうだ。できるかときいたんだ」

千冬は日本食に飢えていた。
先日のように市街に出れば日本食は食べられるが、それはドイツ人にとっての日本食。
生粋の日本人であれば、その味に満足は出来ない。味が薄かったり濃かったり、品名と実在の食事が違っていたり。

不幸にも千冬の口に合わない日本食を出した店は不機嫌なオーラを隠しもしない千冬に恐れた。
日本人に味が合わないというのは彼らにとっても驚きだっただろうが、そこにいるだけで帰りたいと思ったのは生まれて初めてだっただろう。

「できるが…　何故だ？」
「作れ」

会話のキャッチボールができていない。こっちはボールを普通に投げ返しているのに、その球を剛速球で投げ返してきている。エミ

ヤシロウは溜息をつくが、ここで少しでも抵抗すると面倒なことになりそうだと判断し、立ち上がる。
こういうことにはなれている。彼のグローブは過去の経験から分厚くできていた。

「要望は」
「まさしく日本食というものを」

それは何でもいいと同義ではないかと思っても口に出してはいけないのだ。

そして知らず知らずのうちに千冬に自分で作れと言う選択肢を選選ばなかったことにいずれ心眼があったことに本気で感謝する。

「クラリッサ」
「なんでしょうか、エミヤシロウ」
「ここの冷蔵庫には日本の調味料はないのか？」
「ドイツなので」

あるのはベーコン、ソーセージ、パンなど全て洋食のモノ。米の『こ』の字もあったものではなかった。千冬がいるからあると考え

たが、そうではなかった。
シュヴァルツェ・ハーゼの個別隊舎で夕食の準備に取り掛かろうとしたクラリッサ他三名が休憩中の千冬とその暇つぶしの相手をさせられていたエミヤシロウに捕まっていた。

「なに？　元からなかったのか？」
「教官には大変申し訳ないのですがこの隊舎に日本食を作れる材料はありません。知識もなく教官に振る舞うのは愚の骨頂と判断いたしましたので」
「…」

さて、困ったことになった。エミヤシロウはそう思う。
自分が作ることに文句はないのだが、材料がないのでは仕方がない。ここは諦めるしかないだろう。

「残念だが諦め「買ってこい」――――」

その眼は残酷なまでに真剣だった。

「材料も調味料も扱っている店ぐらいあるはずだ。
クラリッサ、部下を率いて市街に買い出しに向かえ。日本食に使える材料と調味料を確保しろ」
「いや、ほとんどわから「了解しました！」――――はぁ」

溜息が出る。
教官という立場とはいえ、こういう形でその権限を使用するとはと思う。
そもそも日本にいたわけでもないのに一目見てわかるはずがない。
大体、それが売っている店すら知らないというのに。

「報告！」
「はい地図をご覧ください！」
数瞬、その間にクラリッサ達は情報を集めていた。
これがシュヴァルツェ・ハーゼの力なの、か？

クラリッサ達が買い出しに出て一時間後。唐突に千冬の携帯が鳴った。
『…日本語が読めません』
予測して然るべきだったかもしれない。

「貴様…！」

エミヤシロウはラウラに睨まれた。

「貴様は我が軍で身柄を拘束されている！　それがどこに脱走していた！」

確かにエミヤシロウの身柄は軍で拘束、ということにはなっている。

だが、それは過去の話だ。

「観察房ではなくキッチンにいただけなのだがね。

それとも、君は今日の夕食はなくても構わないと？　千冬の要望に応えずに何もしない私をそのままにできるとでも？」

「…くっ」

ラウラは悔しそうに食堂に椅子に荒々しく座る。

以前よりも行動の幅が広がり、制限と呼ぶものは少なくなってきていた。

先日の一件はあくまで軍内部の騒動ではあったが、それを捕虜とはいえ、止めるのに協力したのだ。何かあっても不思議ではない。
これには千冬も一枚かんでいるのだが、それは千冬と上層部以外は知らないこと。

「一対多で半日以上追いまわされたのだから何かあってもいいと思うのだがね」

ここでエミヤシロウは攻めに転じた。
先日のラウラ達の袋叩きは久しぶりに肝の冷える戦いであり、彼にとってはもう体験したくのない戦いだった。

ラウラを筆頭に眼の色を変えたシュヴァルツェ・ハーゼの全員が襲いかかってくる。ナイフを持ち、死なないように急所を狙わないのはいいのだが倒しても倒してもゾンビのように生き返り、また襲い出してくる面々。
しかも全員が女の子。軍人とはいえ、手荒なことはできずどうしても手加減をするが、意識を絶たない限り生身で相手をするには全くもって面倒この上なかった。

期限ギリギリにはまさにウサギのように眼を充血させて襲ってきた。
これほどに恐ろしいウサギがあってもいいのだろうかと彼は心底思い、この課題を出した千冬を恨んだ。

「貴様がさっさと倒されないせいで私は教官に怒られたのだぞ！」
「私がなにをしたというのだ。聴取があるだろうということは分かっていたはずだ。それを忘れ、私を全員で襲いかかるように仕向けたのは誰だ。自業自得だ」

隊の者と協力をすることができたこの一見は隊に良い影響を及ぼし、訓練でもより効率的に動くことが可能となっている。
決して悪いことというわけではないのだが、ここからはラウラの意地が問題だった。

「そ、そうだとしても貴様は手加減していただろう！　それが許せんのだ！
「容赦はしていなかったが？」

確かに容赦はしていない。隙あらば投げ意識を刈り取る一撃を食らわせた。
手加減した一撃だが。

「ぐっ…　確かにそうだ…　だ、だとしてもっ！」

まだ食い下がろうとするラウラだったが、ここで千冬が戻ってきた。

「何をしている、ラウラ。席に着け」
「教官…　了解しました…」

負けず嫌いでも千冬には従順だった。

「出来たぞ。運ぶのを手伝ってくれ」

隊の者と協力して作った日本食が並べられる。
ご飯、煮物、ジャガイモの味噌汁、肉じゃが。まさしく日本食とのことだったので、焼き魚も、とは思ったが、こちらの魚は良くわからない。メモに書いたものを最低限揃えてもらい、なんとかこのメニューになった。

さすがに全てが揃えることはできず、足りないと判断してサラダも急遽、追加された。シュヴァルツェ・ハーゼの面々は箸を使うことができないため、８割ほどがスプーンとフォークを持ち、はじめてみる日本食というものに興味が向かっている。

「ふむ見た目は中々だ」
「…食べてその発言、撤回させてくれる」

彼としては長いこと料理とは程遠い場所にいたために腕が錆びていないか心配だった。確かに腕は錆びていた。だが、それは間隔を思い出すようにゆっくりと進めていけば大きな影響は及ぼさない程度。

「では、いただきます」

一口、煮物を口に運ぶ。
味噌汁を啜る。
肉じゃがを――――

誰が見てもこの料理に満足しているのは千冬だった。
口を開くのは唯、食べることだけに。黙々と箸を進める彼女をシュヴァルツェ・ハーゼの面々は見たことがあるだろうか。確かに食

事の際には口数少なく食べていることがほとんどだったが、この様子は初めてだろう。

『勝った』

大人気なく、そう一人の男は思う。

箸に挑戦する者もいたが、慣れないものではやはり食べにくい。諦め、フォークに持ち替えていく中、一人だけ頑なに持ち替えようとしない銀髪の少女。

「隊長、このままでは料理が冷めてしまいます」
「だが、このまま箸で食べられないままではエミヤシロウに負けたことに…」
「戦略的撤退です。時間を見つけて練習を重ねれば箸は持てるようになります。このままでは食べ終わられた教官を待たせてしまいかねません」
「くっ、私はまたあの男に勝てないのか…」

先日の一件で何かと対抗意識を持つようになってしまったラウラだったが、それを除けば態度は柔らかくなっている。僅かにだが。
ただ、料理で勝負意識を持たれても仕方ない。

「…腕は確かなようだ。美味かった」
「それは良かった。あれほど箸が進んでいたというのに不味いと言われてはどのように反応すればいいかと思ってしまった。」

睨みつけられながら、彼は食器を片づけていく。その手つきすらも手慣れていた。

「エミヤシロウ」
「なんだ、クラリッサ」
「後始末は我々が。料理を作ってもらい、片づけすらもやらせてしまっては我々も立つ瀬がありません」
「…そうか、では宜しく頼む」
「はい。
…後で聞きたいことがあるので、窺ってもよろしいでしょうか？」

少々、歯切れの悪かったが、この程度で追及する必要もない。
了承し、彼は訓練場に向かう。

中佐の一件から監視の眼が強くなった気がしていた。
シュヴァルツェ・ハーゼの面々ではなく、軍の上層部がだ。行動

の制限を解除してくれてはいるのだが、今こうしている間にも監視の者以外に誰かが来ている。

黙々と木刀を振るっているだけだというのにそれが恐ろしいかのように見ている者すらいる。

傷はほとんど塞がった。戦闘も余程のことがなければ問題はない。先日の一件で軍への恩はかなり返したつもりだが、まだ少し足りないかもしれない。こっちは殺されても文句が言えなかった状況であったのに、命を救われこうして生きている。

ずっとここに留まるわけにもいかない。いずれは…　去らなければ。

これから降りかかることは全く予想がつかない。何が起きるかもわからない、どういうことが周りを巻き込むかもわからない。

だが、それを考えるのであれば一刻も早くここを離れるべきだった。そうすれば死ぬのは私だけ。悲しむものも誰もいない。何の問題もない。

『簡単に死ぬことは許さないから！』

「…」

ただ、あの言葉だけがその行動に進むことを拒んでいた。

だが、どうすればいいのか。こうしている間にも…

『少々、構わないだろうか』

声をかけてきたのは軍の上官…　ラウラよりも上、政治的にも発言力があるだろうと思われる。

『君は自由になりたいか？』

『自由というのが鳥籠に囚われるという意味でなければ』

ふっ、と男は小さく笑う。

『君のことは大尉の戦闘記録から色々見させてもらった。織斑千冬よりも君の方が…　危険であるということも認識した。こちらの条件を呑んでくれるのなら我々は君に何の枷を付けることもなく、ここから解き放とう』

解き放つ。

その表現がどういう意味を持っているのだろうか。

『…条件は』

だが、それを呑もう。

もう軍の者とは他人ではない。話をした事がある者もいる。戦ったこともある。料理を美味しそうに食べてくれた者もいる。

今までのオレでは災厄を齎すであろうことも予想でいる。

ならばかつてそうだったように変わらねばならない。理想が飽くまで理想だったということを認識した時のように。世界全てが敵に見えた時のように。

『そして結論を言ってくれ。それでいい』

これで終わりなのだろう。

騒々しかったかもしれないが、それでもどこかで楽しいと思う自分がいたことは否定しない。

感情表現の苦手な者がいて、それをフォローする者がいて、それに憧れる者がいる。

歩み寄れなかった者が、見方を変えてことによって少し近づくことができた。

見ることができたものは、オレには眩しすぎる。

『ここから出て行ってくれ』

「エミヤシロウ、よろしいでしょうか――――隊の者は？」
「あぁ、少し席を外している。仕事がどうとかいっていたな」
「…そうですか。
用件はこれなのですが、これは――――」

そこにいたのはいつもと変わりないように見える機械のような男だった。

No．４（後書き）

どうもです玄米です。
今回は少し日常的な感じを出してみました。ただこういうのは難しいですね。ノリで書ききれるか少し心配でした。

ここから物語が展開します。
次回予告。

彼は選択をする。誰の為かもわからないままに彼は歩き始め、その行く手を阻む銀髪の少女。
刺さるナイフ。こぼれる涙。
そこに現れる金髪の少女。彼女はＩＳを身にまとい、凶弾を放つ。
そのとき彼は何を思うのか――――

この予告は９割が偽情報です。

感想やご指摘を頂けると作者は喜び考え知恵熱を出しますので気軽に書いてくださいね。
いろいろ設定変えました。大丈夫かな？

No. 5

「もう少し周りに気を配れ。一人じゃないんだ」
「くっ、わかっている！
集合！　１０分の休憩の後にもう一戦行う！」

エミヤシロウは森の中の訓練場にいた。周りにはシュヴァルツェア・ハーゼの面々が泥だらけ傷だらけで休憩に入ろうとしていた。

エミヤシロウ一人対軍の精鋭という方式であるのだが、それで訓練になるのか疑問に思うだろう。

しかし、午後にもなりきらない時点で４戦して隊は４敗している。奇襲や陣形の甘さを突かれ敗北を決めるフラッグを取られている。エミヤシロウの敗北条件はペイント弾を撃たれるか自信がこれ以上は無理だと判断した時だ。

しかし、その状況になるにはまだまだ先のようだ。

「なんだ、思いの外楽しそうにやっているではないか」
「なに、昔を思い出していただけさ」

軽口を叩きつつ千冬からドリンクを渡される。

「昔、か。
過去の経歴が分からない奴の過去とはどのようなものなんだ？」
「普通に生き、鍛え、今に至る。それだけだ」
「それだけで銃弾を避ける奴がいるか」

狙われていのが分かっているかのように避け、正面から撃たれても回避する。最初こそ隊の面々は驚き身体が固まったかのように隙

を見せたが、今では当たり前のように躊躇なく銃を撃ってくる。

「鍛えた結果だ」

それだけしけ言えないこともわかっている。

隠し事があることは誰しも気が付いているが、それを話させようとは誰もしない。その一線を超えてしまったらいけないような気がしている。

『こちらにも事情があってね、君に出て行ってもらうのは5日程かかる。

…身勝手だと思うが諦めてくれ』

『理不尽とは思わん。私は身元不明でどこまでが信じられるかわからない。そんな人物をこれまで置いてくれただけでも感謝している』

『…そうか。だが、これだけは言わせてくれ。

君に恨みも何もない。世界の為に君には犠牲に…なってもらう』

世界と言っていた。

彼の予想では今の世界の情勢が関係しているのではないかと考えている。

男性の立場が弱い。これが原因の一つではないのか。

確かに織斑千冬のように強い女性は多くいるが、それに匹敵する男性は今のところ確認されていない。いや、探せばいるのかもしれないが、それを実行に移そうと考える者がいないだろう。

そんな世界の中にエミヤシロウという異端が現れた。
彼は彼女に負けはしたが、訓練や手合わせでは勝ち越している。それはラウラからしてみれば夢だと思ったことだろう。
彼が持っているかもしれない秘密を知ることができれば世の男性が強く、ＩＳが生まれる前の世の中に戻すことができるかもしれない。戻すことができずとも少しは立場を回復させることができるかもしれない。

それをドイツが独占してしまうことは世界を敵に回すことと同義かもしれない。
ならば隠せ、というのもいずれは存在が判ることだろう。そしてどの国がそれを行おうとも同じような結果が待っているのかもしれない。

ならばここで彼にそのことを分かってもらい犠牲になってもらう方がいいのかもしれない。現状に甘んじてしまうが、なにかの火種になるよりはまだ良いかもしれない。

「…何のために鍛えたのか」
「なんだ？」
「いや…　なんでもない」

そう、何のために鍛えたのか。
ここにいるのはその結果だが、いまだ過程だ。結末ではない。最期でもない。あの時、人としての最期を迎えると思った時があった

が、それが訪れることはなかった。ならばまだ過程だろう。

あの時に運命は分岐してしまったのかもしれないが、それは判るはずもない。

なにが原因で、何がどうなるのかもわからない状況だ。身を任せるしかないというのもある。

「で、君はどうする」

「勝負だ！　エミヤシロウ！」

ラウラはこの訓練が始まってから彼に勝負を挑み続けている。

結果は全敗ではあるのだが、得る物も多くあるのは確かだろう。

「懲りないな」

「貴様に勝つまでは諦めん！」

そうしてラウラはエミヤシロウに挑み続ける。

「…まさか外出が許可されるとはな」
「全くだ。私は身分不明の不審者だぞ」

外出を許可された。結果からみれば釈放と変わりないかもしれないが、隣にいるのは千冬と。

「何故、私が…」
「文句を言うな。今日はお前が当番だろ」

今日の料理の当番はラウラ。他の者もいたが、千冬とエミヤシロウがいるなら問題ないということで仕事に戻っている。

「…外出などしたくはなかったのだが」
「なんだ、窮屈な生活が気に行ったか？」
「そういうわけではない」

今日が期限の5日目。何も連絡はないが、何かしらのアクションを起こしてくるのは確かだろう。

エミヤシロウは軍が唯で見逃すはずがないと考えている。
他国が自身を捕獲した場合に被る被害を考えれば、殺す方が効率はいい。

みすみす殺されるわけにはいかないが、人の多いところで銃撃戦など考えたくもない。

全てを救える自信がない。

「今日の献立は何なんだ？」
「…君が一番楽しみにしていないか？」
「…うるさい」

図星かと彼は思うが、ラウラが何気に日本のことを気にかけるようになったのを知っている。そもそも千冬からそのことを聞かされたのだから。
彼女はそんなラウラを面白いと評価し、いずれは日本にいる弟に会わせたら面白いのではないかと考えているようだった。

「今日は…そうだな。炊き込みご飯でも作るとしよう」
「なんだそれは」
「材料を入れて――――いや、見ればわかる。夕食を楽しみにしてるといい」
「…」

気になるが、ここでさらに聞き出そうとすると自分が墓穴を掘る

ような予感がしてそれ以上は何も聞かなかったラウラだった。

材料は確保できた。
望む物全てではないのだが、それでもそれなりの物は作れるだろう。
クラリッサからの頼まれた物も買い物袋の中にある。

「それでは戻るか」
「そうだな。雨が降るそうだし、寄り道をせずに行くか」

エミヤシロウの隣を歩く二人。
傍からみれば穏やかに見えるかもしれないが、その穏やかな空気の中でエミヤシロウだけは感覚を鋭く尖らしていた。

軍は彼を自由にすると言っていた。
しかし、それを全て信じることなど無理だ。もしかしたらどこかでスコープがこの頭を狙っているかもしれないとさえ思っている。

そんな気配はないし、どこには怪しい人物はいない。
勘ぐりすぎと思ったが、警戒して損はない

隊舎が近づいて、自嘲するように一人思う。

やはり自分は壊れているのだと。
こんな思考をすることが、すでに他人を信じられないということを露見している。
全ての人を信頼していないわけではない。だが、全てを信じられない。一部の人間は信用に値するが、全幅の信頼は置くことはできない。

ここにいては迷惑がかかる。
去ることは良いことだ。

オレは、常に一人なんだ――――

「どうした、体調でも悪いのか？」

ラウラがいつの間にかエミヤシロウの前に回り、いつもと変わらぬ様子でたずねる。
表情には出していないつもりだったが、何かおかしかったのだろうか。いや、ここで動揺してはいけない。ここで仮面を落としては

いけない。

「いや、君が夕食でどのような表情をするのかを考え込んでいたようだ。

以前のように黙々と食べるのか、それともいまだに上達の兆しを見せない箸に苦戦しながら冷めた料理を――――おっと」

つい数瞬前まで頭が会った場所をラウラの蹴りが通過する。

「それ以上言ってみろ、殺す」

顔を真っ赤にして、事実をこれ以上言うなとナイフを持って伝える。

何もなかったかのように彼は食材を持って厨房に向かっていく。

後ろからの視線を無視し、誤魔化すかのように。

『時間だ』

『…カメラは』

『すでに動作を止めている。問題は何もない』

深夜、寝静まった隊舎の中で数人が息を潜めていた。

『…すまない。こうして私達は自分のことしか守ることができない』

『何を言う。それが人として、国を憂いている者の正しい感情であり行動だ。

寧ろ、私を殺さないということに私自身が驚いているぐらいだ』

彼の後ろには数人の軍人がいるが銃は所持していない。

彼らは上官を守る為だけに配備されているのだろう。そして、ドイツ軍はエミヤシロウには手を出さないという意思の表れが武器を所持しないということだった。

『来てくれ、案内する』

一行は人気のない通路を進んでいく。

『君はこれからどうする？』

『…そうだな。一応、私の故郷になっている日本にでも行くさ。手段は聞いてくれるな』

肩を竦めて冗談めかすと、一瞬だが空気が強張る。

『安心しろ。何も日本と手を組むとかそういうものではない。

唯の郷愁だ。久しく訪ねていなくてね。ただ思い立ったまでだ。

君達が危惧するようなことは何もない。するつもりもない』

それに、日本へ行くと言ったのも飽くまで今の段階でだ。
そう簡単に行けるはずもないし、これから最低限調べることもある。考えなしに行動しては意味がない。

だが、これからどうするか考えてもこの世界で何をするべきか何もわからない。
そうする理由もあやふやな状態だ。そんな状態でなにをしても…
不完全でしかない。

歩いて数分ほどだろうか。
暗い通路を歩いて着いた先は軍の基地の端。恐らく歩いてきた場所は軍の秘密通路だったのだろう。だが、彼にはどうでもいい。

『ここから行ってくれ。私達は君には手を出さない』
『…あんたはそうかもしれないが、そう思っていない奴が一人いるようだぞ』

出てすぐに気配を感じた。慣れ親しんだものであり、今日も戦った。

『どこへ行く、エミヤシロウ』

ラウラ・ボーデヴィッヒ。
ＩＳを身に纏い、立ち塞がる。

Ｎｏ．５（後書き）

どうも玄米です。
スランプですね。ただでさえ起伏の少ないものなのにさらに・・・
うむ、精進せねば。

次回はどうなってしまうのか…

感想・ご指摘をお待ちしております。

No. 6

もしも、本当に機械だったら。
こんな思いはしなかったのだろう。

もしも、この力が夢ならば。
私はここにいないのだろう。

では、一体今の私は何なのだろうか。
私ですら本当に自分が誰なのかわからなくなる。

この想いは本物なのに、脆い。
崩れ去ってしまえば楽なのに、それが辛いから戦う。

辛いことを選ぶ。
それは正しい道なのだろうか。

それが与えられた夢だったとしても――――

「…どこに行くと聞いている」

『…私の、私の願いを一つだけ聞き入れてほしい』

そう、一つだけでいい。

この一つで――――わからせてやろう。

『ラウラ・ボーデヴィッヒと私の間に何があろうとも後で干渉しないでほしい。もちろん、軍に不利益は与えない。

いや、多少の損失は与えるかもしれないが、動けなくなるようなことはしない』

『…いいだろう。

ただし、以後は我々と関係があったことなどは他言無用で頼む。そして、彼女は大切な仲間だ。もしものことがあれば判っているかな？』

『無論だ』

そうして、部下を引き連れて通路を戻っていく。

「待たせたな」

「質問に答えろ。どこへ行く」

彼女の上官を気にする様子もなく、彼女はエミヤシロウだけを睨み続ける。

彼はそんな様子の彼女に溜息をつきつつも説明する。

「別に、ここを去ろうというだけだ」

「何故」

「ここにはもう用はない。それだけだ」

エミヤシロウにではない。軍に彼には用がない。いや、それでは語弊があるが、用は済んでいる。彼が出ていき、以後関わらない。それでいい。

あの上官は人が良いのだろう。エミヤシロウが危険だと判断しつつも甘い判断をくだしている。こうして要求を呑んでくれたことにも最大限の譲歩をしていると言ってもいい。

どっちつかず。ラウラがそれにたいしてどのような判断を下すのかはわからない。

怒るか。

「…まぁ、いい」

「む」

意外だ、と彼は思う。

今までの行動と性格を考えれば軍部が馬鹿にされたりすれば飛びかかってくるか、頭に血が昇りやすくなるぐらいは予想していた。

しかし、冷静にラウラは構える。

「私はただ、貴様と手加減抜きの勝負がしたいだけだ。貴様がどこに行ってしまおうと興味はない。だが、このまま手を抜かれたままでは私が我慢できん。

…ＩＳを使うことは卑怯かもしれん。だが、貴様は強い。どれだけ顔をそむけようとも貴様が織斑教官よりも強いということは私だって理解している。勝てるはずがないということも理解している。現実が見えていないわけではない、事実として認識している。

ＩＳに勝てる人間など世界に片手で数えて事足りる。ならば、その一人の全力をこの目に焼き付けておきたい。

軍というか限られた世界しか知らない私に世界の広さの一端を教えてくれ！
わがままと好奇心でお前に挑む私は叩きのめしてくれ、エミヤ！」
その時の彼は何を思ったのだろうか。
怒りか、嘲笑か、嫌悪か。どんな感情を抱いたかは彼にしか分からないだろうが、少なくとも怒りや嘲笑という人を見下すような態度ではない。馬鹿にするようないつもの笑みでもない。

少しの驚きと、その後の小さな笑みが彼が出した表情だった。

「――――いいだろう。ただこれは記録に残してはならないものだ。映像記録やその類のものを使用しないと約束するならば私は喜んでラウラ、君の相手をしよう」
「わかった。
クラリッサ、軍の衛星を操作して私達を映させるな。他国にも見せるな。やってくれ」
『了解しました』
彼は思う。ずいぶんと溶け込めるようになったものだと。

少し前の彼女には拒絶があった。どんなことが過去に会ったかは知らないが、それがこの数カ月でずいぶんと変わった。まだ固さはあるが、少女らしい一面もある。

この戦いは彼には無意味だ。
手の内をわざわざ見せることなり、秘密を知られる。

だが、それも良いと思えると判断した。

今まで彼女はフルネームでしか呼んでくれていなかった。

姓だけでも呼んでくれたことが、少しだけ彼は嬉しかったのだろうか。

「私の秘密を見せてやろう。
しかし、これは長々と見せるものではなくてね。今の君では一瞬で終わってしまう。だから君を満足させることは出来ないだろう。
だが、手加減抜きだ。教え子には少々刺激が強いかもしれんが、高い授業料を払ったと思って諦めてくれ」

では、いくぞ。

彼に手に一瞬で黒塗りの弓と螺旋の剣が握られていた。
どんな手品かはわからないがそのことを気にする様子もなくラウラは駆けるように飛ぶ。
ＡＩＣで絡め取ろうとするが、どこからか飛来した剣に阻まれ、防御。
気付いた時には彼の姿は無く。

『偽・螺旋剣』

何かが視界を縦に切り裂くような感覚を感じ、空間ごと抉るような荒れ狂う暴風と衝撃に、ラウラは意識を失った。

「…」

佇むその姿はこの惨状を引き起こした張本人とは思えないほど、その長身が嘘のように小さく見える。

ラウラの怪我は大したことは無いようで、触診を終えると少しの間、彼女を見つめ、踵を返す。

「やりすぎただろうか」

「いや、ラウラには目標ができただろう。自惚れともとれるが、こいつは私になろうとしていたからな。

それが少し逸れただけでも良しとするさ」

木陰から現れる織斑千冬。

その手には刀が握られていた。

「君もか」

「私よりも強い奴はあまりいなくてな。本気で立ち向かえる奴というのは貴重な存在だ。それがどこに行くともしれんとなれば、ましてやそいつの本気が人知を超えるものだと知れば挑まないわけにはいかないだろう？

あぁ、そういえば貴様には手加減された借りがあったな」

ニヤリと嗤う彼女は美しく、だが冷たい殺気が浴びせられる。

「そもそも上層部は情報を漏らしすぎだ。

私が手を回さなければ貴様は世界で二人目のお尋ね者だ」

ということはそうなる可能性はとても低くなったと考えていいのだろう。

そうやったのかは知らないが、彼女が嘘をつくとは思っていない。

だったら、ここは彼女の望みに応えるのが礼だ。

二振りの剣を抜く。

干将・莫耶。
初めてエミヤシロウと戦ったあの夜に見た剣。
千冬に干将・莫耶に思う。美しいと。

日本刀のように美術的に価値のある物が多いが、エミヤシロウの持つ剣はどこか違う。美しさがあり、全てを切り裂くような鋭さがあり、清涼とした雰囲気がある。

もしかしたら奴はあれで人を切っているかもしれない。あの夜は皆、柄や峰打ちで全滅させられている。

だが、おかしいのはここからだ。
軍はあの剣を返却していない。今も倉庫で二度と開封されることはないというほど厳重に封印されている。

それがその手にあるのはどういうことだろうか。

「…どうした、かかってこないのか？」

哂う。
こっちを嘲笑い、脱力した姿勢。あまりにも隙だらけ。

だが、千冬の構えはゆっくりと、正眼をとる。
挑発に乗らず、自分のリズムで戦闘態勢を作る。

それを、エミヤシロウは待った。
万全になるまで数分もかからないだろうが、彼女の集中を乱してはならないというかのように彼は静かに佇むだけ。

一分――――――いや、３０秒かもしれない。だが、長く…　とても長く感じた。

「一つ聞きたい」
「…」
「貴様はこれからどうしたい」

無言。

「これから人を殺すのか？」

ピクリと反応。

「貴様から感じたのは血の匂いだ。数え切れない人の血の匂い。眼に映る危険なモノ。
…だというのに、貴様の存在からは危険さはおろか人殺しの気配すら感じない。矛盾だ。この疑問の答えはどれだけ考えてもわからなかった」

俯いていることで、表情は見えない。
だが、空気が変わった。

「そして時折見せる眼に私は興味を引かれた」

冷たい。

「人に絶望することを拒むような、何かを望んでいるような眼だ」

「…」

「これでもだんまりか？　まぁ、いい。

貴様は軍で何かを調べている時はそんな眼をしていたぞ。そしてラウラ達との鍛錬では希望に縋るような光を見た。なのに、それすらもどこか遠くに見ている。

貴様のこれまでに何があったかはわからないが、そんな眼をする奴をこのまま野放しにすることは軍が許可しても私が許可できん。

せめて、首輪くらいつけなければな」

そこで、エミヤシロウは笑った。

「なにがおかしかった？」

「首輪、か。付けてどうするつもりだ？」

「そうだな、家政夫としてでも仕立てて見せようか」

「生活能力のない君は仕立てることは無理だろう」

「…なぜそれを」

「見ていればわかるさ」

笑い話。だが、二人の集中力は若干の乱れこそあれ、上がってい

く。
そして一瞬の間。
空気が完全に変わった。
「考えは変わらないか？」
「――――私もこれからどう生きていこうか迷っている。
だが、やらねばならないとは視えている」
「…そうか」

一気に空気が濃くなったような感じがする。

エミヤシロウは構えであり、構えではないそれを取りつつ、集中する。
負ける要因は無いと言っても、油断はしない。どんな状況でも対応できるようにあらゆる可能性を思考する。

突きか、上段からか、袈裟か、逆袈裟か、薙ぐか、銃か、どこからか援護されるか。
あらゆる可能性を考慮して構える。

「ふん。そうか」

パチン、と刀を鞘にしまう。

「…む？」

拍子抜けどころか理解が追い付かない。そんな表情をエミヤシロウはしていた。

「なんだその顔は。みっともないぞ」

「いや…　戦うと思ったのだがね」

「誰が戦うか」

戦況を見て、そう答えたのであればエミヤシロウはこのまま行ってしまうつもりだった。

だが、千冬はそんな感じではなく、納得してうえで戦うことをや

めたようだった。

「なぜ」

「そんなもの、私の気分次第だ」

腕を組み、堂々と言い放つその姿に一瞬、眩暈がする。

「…真っすぐな眼だったからな」

千冬は空を見上げながら言う。

「迷いはあると言ってきながら、迷いのない眼だった。危険なものでもなかった。決意があった。

私が止めたところでどうすることも出来ないように思えた。

行け。いずれまた会うのならその時にでも聞くさ」

何をとは言わず、千冬は彼に向かってくしゃくしゃになった紙をよこした。

そして、彼女はラウラを抱えて行ってしまった。

別れの言葉は無く、だが、これでいいと思える。

「…いずれまた会うか。それまで、世界が私を生かしていればいい

のだがな」

その言葉の意味を真に理解しているのは彼しかいない。

そして理解してしても、それがいつやってくるのか、どういう行動に出るのか全く予想がつかない。

魔法使いですらわからないだろう。

「君面白いことしてるねっ！」

ならば、未来へ駆ける科学者では如何だろうか。

No．6（後書き）

どうもです、玄米です。
最近アニメをいろいろ見始めましたよ。面白い、面白よ！
そして書いてみたいネタがあるんだけど、それはまだ先の話ですね〜　しいて言えばＴ＆ａｍｐ；Ｂですよｗｗｗ
まぁ、短編か三話くらいの続き？

はっ、あとがきから脱線している！？
ではあとがきを。
ちょっとシロウやり過ぎかな〜なんて思ってますけど、大丈夫だと思ってやっていきますよ。
あと、いろいろ加えたいけど、加え過ぎたらｆａｔｅのエミヤシロウではなくなると思っちゃう…
そこらへんの基準はどうなんでしょうね？

あと私読んでて思うのは話の脈絡なくね？　と思ったり？　自分で書いているから中々客観的に見れない部分がありますね。あまり突飛にしても…
まぁ、ちょいちょいやっていきますよｗｗｗ

No. 7

現れたのは…　まるでウサギのような髪飾りを付けた女性。
イメージが沸きにくいが、不思議の国のアリスがウサギの耳を付けて現れたとでも言えばいいのだろうか。

しかし、彼女が何故ここにいる。顔は知っている。
世界から追われている今の時代を作ったと言っても過言ではない張本人。

「篠ノ之束、か」
「うむ！　世界が認める天才だよ！」

自分で言っていて恥ずかしくは…　ないのだろう。見る限り自信の塊のようだ女性だ。資料を見てそうも思っていたが。
次世代の科学をたった一人で築いた彼女は天才だ。それもそこらにいる天才を凌駕する天才。

「君、面白いことしてるねっ！　この私にそれ見せてごらんよ！」

見られていたか。そんな気配は感じなかったが…　いや、ここにいるのも気配がない。

「ホログラムか」
「むむむ？　よくわかったね。ちーちゃん観察の為に用意しておいた私お手製の移動映写機を見破るとは！　貴様何奴！」

…めんどくさくなってきた。
仮に、ここに本人がいたとしても見られたから殺すという手段に

はならないのだが。

私に用はない。
会うのはこれで最後だろう。あっちは指名手配中で私は国籍も存在もない危険な奴。ドイツ軍から情報が漏れるとは思わないが、用心してこれからの行動を考えねばなるまい。

「ちょっとちょっと。君のさっきやってたこと見せてごらんって」

無視だ。
早々魔術を見せる物ではないし、彼女に見せるのは魔術回路がなかったとしても危険な気がする。
なにせ、大魔術を科学で再現しかけている女性だ。それの理論もたった一人で確立している。すでに見られている物は仕方ないが、これ以上の情報の漏えいは危険だ。

「むぅ…　見せてくれないと君を国際指名手配犯にしちゃうぞ☆」

なにか入らん物まで付いていた気がするが…

「勝手いすればいい。元はそのような存在だ。今さら追われたとしても依然と何も変わらない」

精々、魔術師が軍になるぐらいだ。それぐらいなら問題ない。

私はまだ何か言っている彼女を映す機器を置いて国から出て行った。

そこからがしつこかった。

私を本当に国際指名手配犯にしたらしく、郊外で銃を向けられた時は本当にやったのかと思った。

そこでは逃げ、戦闘はしなかった。

それに、どこで彼女が見ているかもわからないので、魔術の使用は控えた。使って強化ぐらいだ。

投影はしないようにして、二か月が経とうとしている時だった。

空からニンジンが降ってきたのは。

「…私は夢でも見ているのか？」

空からニンジンが降ってくるなど、人に話せば病院を紹介されかねん。

そかもしれが2m近くもあるニンジンであればより不気味にもなる。

「ふっふっふ、ついにこの時が来たようだねっ！

じゃじゃーん！　束さん登場！」

大仰にドライアイスでも使ったかのようにニンジンの中から出てくる彼女に私は本当に頭痛を覚えた。

「…何しに来たんだ？」

「何って、君の使っている技術が気になるから調べに来たんだよ？

君には興味ないけど、その技術には興味がるからねっ。

さぁ、私にその技術を調べさせなさい！」

どっから出したと突っ込みたくなるほど器具を取り出し、私に向かってくる。

…このまま大人しくしているのも面倒だ。私がここまで追われる原因になったのは彼女のせいだ。ドイツ軍との契約を即効で破ってしまったに等しくなったのは。

見せてやろうではないか。

魔術を。

「――――およ？」

彼女を中心として剣を射出。

ロボットのようなアームからなにから破壊する。私が危険だと思った物は悪いとは思うが破壊させてもらおう。

「うぅん」

彼女は難しい顔をして空間にディスプレイを浮かべると、何かを打ち込み始めた。

「空間に歪みは出来ないし、素粒子でもなさそう。でもそこに存在していて質量を伴って鉄を貫く硬度を持った剣…

おかしいな…　私に判らないことなんてないのに…」

そこで彼女は初めて私に困ったような、不安そうな表情を見せる。

「いや、そんなことない。私は天才なんだし、わからないことはない。全ての現象には元となる事象があるんだし、それが分かれば…
でも何か観測できたわけでもない…　無から有を作るなんて考えられないし。じゃあそれに類似したなにか？　でもそれなら観測できるはずだし、まるで――――」

「まるで魔法、か？」
「あり得ない！」

声を荒げ否定する。
科学者が信じるのは己の知識と結果が出る事象のみと聞く。それがオカルトに等しい物を目にすれば感情も高ぶるか。
いつも笑っていたからこうして真剣に悩んでいる姿は少々心苦しい。

「なんで？　どうして？　わからないなんて今までなかったのに…」
「それが今の科学の限界ということだ」

だが、私は突き放す。

「科学では理解できない、解明できない事柄もあるということだ。観測する技術が確立されていないということもあるだろう。この世界に私と同じ人間がいないかもしれないということもあるだろう。
私に構うな。私は君には理解できない人間だ」

魔術など理解しなくていい。
魔術の血生臭さなど知らなくていい。

それから、私の前に篠ノ之束が姿を現したことはない。
同時に、軍やその手の者たちから追われることもなくなった。

では、当初の予定通りに日本へ渡るとしよう。
密航も久しぶりだ。

その日、私の久しく動くことのなかった携帯電話が鳴った。

「もしもし」

『…ちーちゃん？』

「束、何か用か？」

珍しく、声に元気がない。いつもは煩わしいと思えるぐらいい元気な奴がこうまで元気がないと逆にこっちが表示抜けしてしまう。

『私にもわからないことってあったんだね』

「…なにをした？」

束の口からは衛宮士郎にちょっかいを出したことと、理論のわからない技術を調べたとのこと。

ドイツ軍はもとより、私も理解できなかったあいつの力。ＩＳなどよりもさらにわけのわからない…　いや、どこか得体の知れないナニだった。

「そうか、お前でも理解できなかったか」

『うん。あの人は観測する技術が確立されていないって言ったけど、考え得る全部のことはやったよ。でもなにも出てこない。新しい技術を投入してみても何もわからなかったよ…

まるで魔法だった』

魔法か。確かにあいつは魔法使いのように手元に取りだしていたな。

「ＩＳではないのだな」
『むしろＩＳだったらよかったよ。素粒子とかじゃなかったし…
本当に魔法だったのかな』
「かもな」
『え？』

らしくない。私らしくない。
自分の目で見たことは信じるがそれ以外はあまり信じることのできない私だ。
だが、あいつの力はＩＳではない。ではほかにどんな技術がある？　あれば束が観測できるし、解明できるだろう。天才なのは認めている。世の中を変えてしまうぐらいにはこいつの頭は異常なほどにおかしい。

「あいつは空から降ってきた。飛行機でも宇宙からでもない、空からだ。どういう理由かは一切わからない。だが、あいつの不可思議な力と強さは普通では言い表わせない。
だったら、魔法使いでいいんじゃないか？」
『――――そうだね。それでいいかもしれないねっ！』

その答えもらしくない。
だが、それでもこいつが少しでも元気を取り戻してくれればとりあえずは良いだろう。

『あ、ちーちゃん。さっき空から降って来たって言ってたけど、それっていつのこと？』
「ん？　あれは確かー――――」

その返答が、あいつと私達が再び出会う扉のカギになろうとは思いもしなかった。

福音事件のあと、俺は夏休みをまだ楽しめないでいた。
事件のことセカンドシフトした白式関係のことで毎日が取り調べ、調査、実験の繰り返しだ。

だけれど、それも今日だけは違う！
皆は今日が一週間の内で唯一の休みであることを知らない。
たまには一人になりたい時だってあるし、買い物もしたい、家のこともしたい。しばらく帰っていないから埃が溜ってるだろうし。掃除もしたい。

街に繰り出して楽しむぞ！

そんなことを思っていた2時間前。
俺の目の前にはウサミミ髪飾りを付けた友人の姉が知らない男性に指を刺していた。

「君はこの世界じゃない別の世界から来たんだねっ！」

世界は相変わらず、平和だ。

No．7（後書き）

最近めっきり寒くなってきてお茶がおいしい季節になってきましたね。そんな時に飲むもの。そう！　玄米ですどうも。

今回はちょっと少なめ。展開もそこまで進まない。
でも時系列は一気に数年進んでしまいました。なんかこのぐらい進ませないとちょっとおかしな話の流れになりそうだったのでｗｗｗ
そんな感じです。呼んでくれてありがとうございました。

感想お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6131w/

科学と魔術の交差

2011年10月28日19時04分発行